陸上クラブのエースの少年二人と
コーチの女性二人が
合宿先のコテージで激しい4Pをした話
後編

そして決行日の夜がやってきた。

合宿所の浴室は広い。

いつもは別々に一人ずつ入ることの方が多いが、その日の夜は珍しく竜太郎と貴之の二人が会話をしながら一緒にシャワーで汗を流していた。

「だけどさ・・・・やっぱり俺無理かもしんねぇよ、何度も考え直しはしたけどさ。こんな修行みたいな合宿があとまだこれから１週間続くんだぜ？俺が弱いだけかもしらねぇけどさ・・・・練習にも気持ちが入らねぇよ」

「確かに俺も同じ。あきらめては考えなおしての繰り返しだよ。あぁ・・・・苦しいよなぁ、なんか良いことでもないかなぁ・・・・」

すると！！

ガラガラガラガラガラ・・・！！

浴室の引き戸を勢いよく開ける音。

「んっ？？」

入り口に背を向けて洗い場で体を洗っていた二人が、その音に気付きほぼ同時に風呂椅子に座ったまま振り向いた。

「えっ！！？？？」

ほぼ同時に驚愕の叫び声をあげた二人。

まるで合宿所を囲む平野に響き渡りそうな大きな驚きの声だった。

無理もない・・・そこには、陸上のトレーニングを指導してくれるためだけにいるはずの女性コーチ二人がとんでもない姿で立っていたのだ！

「お二人さんっ・・・・毎日の練習、身が入らなくて困ってるみたいね？」

突然の状況にどうしていいか分からず、口を開けてあたふたしている二人に由希子は続ける。

「私たち全部分かってるの。その理由がね。あなたたち、きっと性欲が有り余ってててどうしようもないんでしょ？？」

まるで道場破り！！とばかりにバスタオルすら持たず、裸で男たちの入浴中現場に入ってきた由希子。腰に手を当てて仁王立ちしている。

そして一方で、バスタオルを脇の下からしっかりとかけて裸を隠し、由希子のそばで様子を窺っている美保。

恥じらいながらも美保の頬は紅潮し、高揚している内心がはっきりと表れている。

逆に、由希子はもう覚悟を決めきっている、潔いその態度。

こんな状況になっても剛直なその姿勢と口調は、トレーニングの始動時と何ら変わらない。

まさに対照的な二人だ。

「あなたたちがセックスしたいってことなんて分かってるの。単刀直入に言うわ、今から私たちコーチとあなたたちはセックスをするのよ。そう・・・・そうなの！それでいいのよ！！それで性欲を解消して、また明日から心機一転トレーニングすればいいの！」

ただただ驚くばかりの二人だったが・・・。

言っているその口調はトレーニング時と同じ、しかし由希子のその姿は、何もまとっていない全裸。

目の前の女体を見て・・・・。

二人の目の色が変わっていく・・・・・。

そして・・・・・

「そんなこと、し、してもらって・・・・・い、いいんですか！！！！？？？？」

「ほ・・・・ほんとにいいんですか？？」

まだ動揺を隠せない二人。

しかし二人ほぼ同時に返したその返事には、確かな歓喜の気持ちが内包されていた。

由希子は美保の方を向いて囁く。

「ね？この子たち拒否なんてするわけないでしょ？私も女よ。この子たちが私の胸やお尻に密かに向けてくる視線に気づいていたわ」

何もないこんな田舎の合宿所で・・・・必然的に二人の性的な視線はコーチである由希子と美保の体に無意識に向けられており、由希子はそれにはっきりと気付いていた。

だから、由希子はここまで潔く彼らに大胆すぎる提案ができたと言うわけだ。

ゴクリ・・・・。

小さく唾を飲み込む美保。

どんなことがはじまるの？？？

眠れなかった昨晩。気真面目で真っ直ぐな美保にとっては、過去に経験の

ないまさに衝撃的な状況。
　だけど、由希子の陰に隠れている暇などなかった。
　「美保さん、あなたもこれからすること分かってるんでしょ！？だったらバスタオルなんて巻いて隠してたって仕方ないわ、早く脱いじゃいなさい！」
　広い浴室に４人が集まった。
　ついに、淫欲のセックス指導が幕を開けたのだ！！

　「いいわぁ！！もっとおっぱい吸って！チュゥチュゥッって音立てて！もっともっとぉ！」
　「はい・・・ムチュゥゥゥッ、チュプププ」
　「美保さんも恥ずかしがってる場合じゃないわよ！！ほら貴之くんのおチンポ舐めてあげなさい！」
　「はい・・・ジュブブブ・・・・私も自分で・・・・ジュルルル・・決めたことですから・・・・・・ジュルルル・・・とっても美味しい・・ジュブ」
　美保は貴之のビンビンにそそり立つペニスを激しい啜り音を立てて舐める。
　「ブチュルルルルルルル」
　５分前に由希子の指示で半ば強制的にはぎ取られた美保の体を隠していたバスタオルは、浴室の床に投げ捨てられている。
　そう。４人とも裸なのだ・・・・。
　裸でセックスと言うトレーニングに勤しんでいるのだ。
　この時ばかりは・・・・合宿の本来の目的など４人の頭の中にはない。
　「竜太郎くんも貴之くんも・・・・ンチュルルルブブ・・・絶対に・・・ンチュルル・・遠慮しちゃだめだからね！ブチュルルルル・・・私と美保さんの体で・・・チュプププ・・発散して、思い切り英気を養ってちょうだいね、レロレロ」
　「はい！コーチ！！うぁはぁぁぁぁ！！」
　二人は声をそろえて返事。とても元気が良い。
　二人は、陸上トレーニングの時よりもずっと生き生きとしている。
　女性コーチたちの体を貪りながら、二人はいつになく輝いているのだった。
　そして４人は誰が言い出すでもなく、こんな状態に移行した。

“４人が輪っかのような状態になり、４人とも全員、口を目の前の異性の性器に持って行き、舐める”
という体勢。

—体験版はここまでです—

—続きは商品版でお楽しみ下さい—